

鳳凰閣の建設背景と建築的特徴

大田区の歴史的建造物（1）

Architectural characteristics and the construction background of Hououkaku Historical buildings in Ota ward, Tokyo: Part 1

○ 大川三雄², 片桐正夫¹ 小島陽子²

Mitsuo Ohkawa², Masao Katagiri¹, Yoko Kojima²

1 建設の背景

(財)清明会は、大正 9 年、仏教と儒教の精神を元とする東洋文明を広く人々に知らしめるための啓蒙活動を目的とした組織として誕生した。その(財)清明会によって設立された清明文庫は、設立趣旨によると、「勝海舟先生の遺蹟を保存し、且国民精神涵養に資すべき図書を蒐集し、公衆の閲覧に供えて社会教育の一端に貢献し、本会に於いて行ふ他の事業と相俟ち、依りて以って、立正安国の道場たらしめん」とある。つまり、国民精神涵養のための図書の蒐集と閲覧、そして講堂での講義開催等を目的として建てられたものである。

近くにある大田区立第六中学校の敷地は、以前に勝海舟が別邸を営んでいた場所である。その別邸内にあった木造茅葺平屋建て、建坪 33 坪の「洗足軒」という建物を譲り受け、さらにその移転地として、海舟の遺族から寄贈されたのが、旧・清明文庫の敷地である。その敷地の北側に隣接して海舟墓所及び西郷隆盛（南州）の留魂祠のある墓苑がある。

清明文庫の設立に際し、勝精伯爵と(財)清明会(代表男爵平山成信)の間では「土地の寄贈」および「墓地及留魂祠保安ノ件」、そして海舟に関する「遺稿出版ノ件」等々について幾つかの契約が交わされているが、譲り受けたはずの「洗足軒」の建物がその後

どうなったのかは不明である。昭和 8 年には現在の鉄筋コンクリート造 2 階建ての建物が完成し、清明会の活動拠点として使われてきた。昭和 29 年には(株)学研に所有が変わり、現在は鳳凰閣と改称されている。

2 建築的特長

建物全体は鉄筋コンクリート造 2 階建ての立方体の形態ながら、南側立面において特徴的な意匠をみることができる。左右対称で、正面中央部には 4 本の段状の柱型が垂直に伸びたネオゴシックのスタイルとなっている。柱型どうしの間も、上方においては網代組を模した金地の装飾タイルが張られていることから、日の光を受けてキラキラと輝き、建物の象徴性を際立たせている。その下の鉄製の窓格子も鋭角的なデザインが採用されている。立面は 3 層に分節され、最上部の軒周りには大きな曲線を描いた表現派風の処理が施されている。躯体の中間部はスチールサッシュの入った縦長の窓、そして腰部はタイル張りながら、ペンキの吹き付け仕上げとなっている。いずれの外壁も後にペンキ仕上げとして手が加えられた可能性が高い。

1 階の玄関部分は概ね竣工時の様子を残している。床は、エントランス部と階段脇のところでは異なるタイル仕上げとなっており、腰壁には緑黄色のスクラッチタイルが張られている。スチール製の両開き戸は内開きで、外側には鉄製で手動式のシャッターが入っている。階段の親柱と手すりは共に木製で、人造石研ぎ出しの側壁をもつ。玄関と部屋とを区切る両開きの扉には装飾ガラスの欄間がついている。

1 階は、竣工時には図書館として使われていたが、現在は床や壁が増設され、間仕切りによって部屋が区画されている。正面突き当たりに鉄筋コンクリート造の書庫があり、その入口には線状模様のタイル張りの枠があり、ここにもシャッターが設置されている。

2 階は講堂として様々な講演会や会合に使われていた。南側の階段室の脇、南西角に応接室(控え室)がある。四周に約 2M の高さで鋭角的な意匠の木製



図 1 南側正面

建具が用いられ、天井は漆喰で大きな曲面で折り上げられており、部屋としての格式の高さを伺うことができる。窓は縦長の両開きで上部がガラスの嵌め殺しとなっている。2階の北側正面は中央部に舞台が設けられていた。隅切りで卵鍔模様野ついたプロニウムアーチがまわり、両脇は装飾のついた木製パネルで飾られている。現在は舞台が取り払われ、部屋の東寄り中央に間仕切りが付けられている。また北西角には腰板張りの講師控え室があり、演台に上がるためのドアが敷設されている。

講堂の東側と西側の壁には、1スパンの中に3連の縦長窓が全部で9つ付いている。嵌め殺しと上げ下げ部、滑り出しとを上下に組み合わせ、広い講堂への採光と夏場の通風を考慮した窓となっている。この窓が内部空間に広さと明るさを生み出し、また外観においても重要な要素となっている。

本館の北側に突出する形の書庫は、当初は2階建てであったが、現在は3階に改造されているが、書庫としての機能のため、極めて堅牢な造りとなっている。屋上は陸屋根形式で、屋上庭園としての利用が可能で、近くの洗足池や隣接する勝海舟と西郷隆盛ゆかりの墓苑など周辺の景色を望むことができる。

3 まとめ

鉄筋コンクリート造の採用、明治から昭和にかけて教育関係の建築意匠として多用されたネオゴシック様式を基調とし、表現主義やモダニズムの影響を感じさせる外観意匠、細部装飾においては鋭角的な

デザインを狙ったアール・デコの影響も受けるなど、旧・清明文庫の建物は、昭和8年という時代相を見事に体現している点に最大の特徴がある。その後の改変にもかかわらず、南側の玄関及び階段室、応接室の部分は床、壁、天井等の意匠と仕上げが当時のままに残っている貴重な作品である。また洗足という場所と勝海舟という人物とを結びつける歴史的環境の形成において、その一翼を担う役割を果たしている。

尚、本報告は、登録有形文化財指定を受けている「鳳凰閣」（旧清明文庫）の取り壊し計画について、現所有者である（株）学研より申し出があり、大田区近代文化遺産調査会（代表：片桐正夫）大川三雄、小島陽子、牧野 徹[建築文化研究所]、木川正也[同]、大塚慎平[日本大学大学院生]、奥田優人[同]、高木智加[同]が、平成23年4月1日～同年4月3日に行った建築調査に基づいている。

<参考資料>

- 資料1) 宮原六郎『勝海舟先生遺跡保存 清明文庫設立趣意及計画要領』清明会事務局編発行、大正13年10月
- 資料2) 『清明会終結記念 勝海舟先生戊辰日記』（抄）清明文庫編発行、昭和10年2月
- 資料3) 鳳凰閣平面図（鳳凰閣使用部署配置図）、学研提供
- 資料4) <http://otaku.edo-jidai.com/107.html>
- 資料5) 『大田の歴史的建造物 大田の文化財 第34集』大田区教育委員会編発行、p.90
- 資料6) 『日本近代建築総覧 各地に残る明治・大正・昭和の建物』日本建築学会編、1980年、技報堂
- 資料7) 山本たか子「洗足池周辺の文化財」『大田区立郷土博物館紀要 第16号』大田区教育委員会編発行 2005年度、pp.6～15

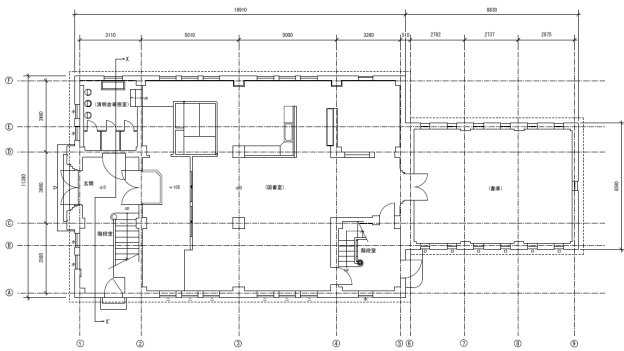


図2 1F平面図

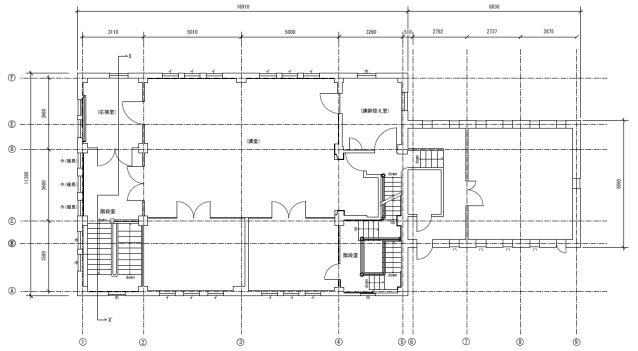


図3 2F平面図

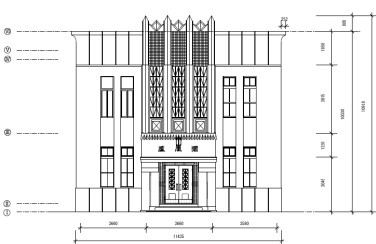


図4 南側立面図

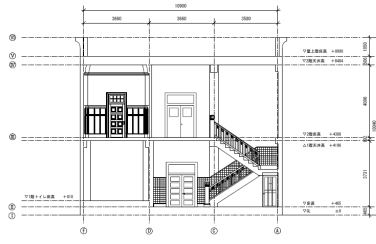


図5 断面図

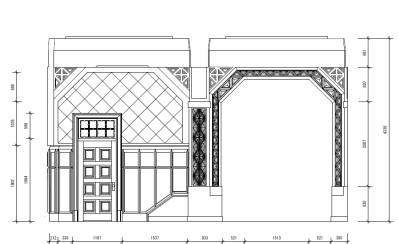


図6 講堂展開図